

ロクアカ集団コラボ企画！『(☒ ω ☒)スヤア』

エクソダス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エルレイで募集したコラボ企画です。
どうぞ。

目次

セリカ大先生は怒である。

—————

1

1話

—————

4

2話

—————

14

セリカ大先生は怒である。

フイールに会いたいんじやわれ
なので閉じ込めるんじやわれ

おつと待て待て、無慈悲なブラウザバックは止めたまえ諸君。焦るんじやない、まるで太陽のように燃えながら落ち着くんだけ若人たによ。

さて、まずは自己紹介と洒落こもう。

私はセリカⅡアルフォニア。グレンⅡレーダスの最愛の母である→！

む、そんな事は知っていると？とりあえず『集団コラボ』という単語に惹かれて見に来たらセリカが変なこと喋ってるんだが？だから落ち着きたまえ。

わかったよ。一旦今回参加して頂いた（強制的）者たちの紹介をしよう。

トラバサミ様作

『ロクでなしに憑依した』

憑依グレン

アステカのキャスター様作

『バッドエンドの未来から来た二人の娘』

フィール

自宅ニート様作

『危険な荷物持ち』

エルソー

ポン酢和え様作

『ロクでなし魔術講師と赤毛の剣聖』

ユウキ

エクソダス

『ロクでなし魔術講師と帝国軍魔導騎士長エルレイ』

エルレイ

とまあ、今回の参加者（物理はこのメンツだ、見たことある小説も中にはあったのでは無いのかな？

さて、少し長くなるが聞いてくれ諸君。今回この企画を計画した理由についてだ。エルレイとフィールのコラボを見れば分かるんだが…。

私の扱いがひどいんだよ。

む、『お前強すぎるから、仕方ないだろ』だと…?!

そういう問題では断じてないのだっっ!!エルレイとフィールのコラボは2回あったのだぞ?!それなのに私の出番は2回だぞ

2 回 っ!!!

しかもだ！普通の出方ならまだしも一回目は回想に出てきただけ

!!

2回目は私のコピー体が！敵対ツツ!!
どう考えてもオカシイダルウオウ
!!!???

まあ、そんな大人な事情がありつつ、あいつらを誰もいない学院に閉じ込めるって訳だ。

むっ？それじゃあなんで他の奴らを…って？それはな…話せば長くなるんだが…。

寝不足で目をつぶって

ガ チ ヤ ガ チ ヤ

イジってたら間違えてしまったんだ。キヤーツセリカオバサンオ
チャメー。

もちろんそれ以外にも理由はあるが、説明はそれくらいにしておこ
うではないか、時は金成ってね。

さてさて!! (落語風)

今回始まりますのは!

突然誰もいない学院に飛ばされる5人の物語!

何故こうなったのか不明!やった者の意図も不明!そんな状況で
彼らがどんなキヤツキヤツ!を見せてるれるのかご期待!

ま、もしかしたら殺し合いになるかもだがな?

どうやったら学院から脱出出来るかは、また途中で話すでしょう。

あ、ここは私(神様)視点で物語が進むので、違う視点が見たいも
のは是非、別作品を見てくれたまえ。

では行こう!

1話

「う……ん？あれ……ここは教室……？え、みんながない」

む、早速赤髪の少年が目を覚ましたようだ。キヨロキヨロと周りを見まわしている。もちろん、私が作った幻想の学院なのだから、知り合いなど居るわけがないのだがな。

その赤髪の少年が見まわしていると、黒板の近くの壁にもたれかかっている。20代くらいの青髪で、軽く後ろに縛っている女性を見つけた。

ちなみに胸は小さ……おっと、やめておこう。殺される。

「……………ん？」

赤髪の少年は、どこか考えるように青髪の女性を見つめる。

おそらく、自分の知る少女、リエルと似ていると思っているのだろう。

本人だからな！

「……………ん」

おっと、その青髪の女性がお目覚めだ。まだどこか眠そうだがきよろきよろとあたりを見渡している。

「……………？あなたは？」

青髪の女性は、赤髪の少年に気づいたようだな。

「あ……どうも……俺はユウキィイグナイトって言います…、一応アルザーノ帝国魔術学院二次生二組の生徒です。貴女は？」

「……………エルレイィレイフオード。この学院の、錬金講師」

「エルレイⅡレイフオード……さん……。ん？この学院の錬金講師？」

おそらく、そんな錬金講師など聞いたことが無かったのだろう。そして、エルレイはレイフオードと名乗ったんだ。違和感があって当然。

そして、エルレイはじつとユウキの顔を見た。

そりやそうだ。イグナイト。この名を素通りするほどエルレイはあほじゃない。

「……二次生のクラスで、君は見たこと……ない。それに……イグナイト？」

「……イヴⅡイグナイトを知っていますか？俺はちゃんと血がつかっているイグナイト家の人間ですけど、何か気になることでも？」

「……イヴと……血がつかつてる……？」

エルレイは考えた後、可能性の一つを口にする。

「……弟？」

大正解である

「はい、イヴ姉の弟ですよ」

「……そっか」

エルレイは何とも言えない表情を見せた。

当たり前だな！自分の婚約者の血筋が完全に別人として目の前にいるんだからH A H A H A!!

ガラガラガラ

と、突如教室の扉が開いた。

「……………つてグレン？」

そう！我が愛弟子！グレン！！レーダスだ！キャー！

「……………ん？誰だお前ら？勝手に教室に入ってるんじゃないよ」

ぼさぼさで整えていない髪を掻きながら、我が愛弟子グレンはめんどくさそうに言った。あの髪剃ってやりたいな。

「……………ちよつと、流石に自分の生徒の顔を忘れるのはダメですよ？」

ユウキはグレンに対し、知り合いであるかのように話す。

ま、グレンであつて別のグレンだから、わかるわけがないのだがな。

「いや、お前みたいな生徒知らないっていうか、そもそもいなかったと思うんだけど」

グレンは何を言っているんだこいつ、といった表情でユウキに告げた。

「そう……………ですか……………」

ユウキは、少しだけ悲しそうな顔をした。

「ええつと……………」

今度グレンに話しかけたのは、エルレイだ。少し冷や汗をかいている。おっと、エルレイにはもうバレるっぽいな。

「私のこと……わかる？」

「んんん……」

グレンは、じつとエルレイを見つめる。

「……リエル？ いやでも、流石にデカいというか……うん、知らね」

一瞬リエルだと思ったようだが、別人だと割り切る我が愛弟子。
女の子の成長は早いんだぞー？ グレンよ（無理があります）

「……………」

エルレイは、とても面倒な顔をした。草

「えっと……ユウ君……だっけ？」

その声に反応し、ユウキはエルレイのほうを向く。

「えっと、ユウキですね。どうかしました？」

「殺戮剣……、聞き覚えある？」

説明しよう！ 殺戮剣とは、エルレイの婚約者、シユウⅡイグナイト
の執行官ナンバーの名前である！

「殺戮剣……？ 何かの剣術ですか？ 一応俺も剣を使っていますけど、そんな剣術は聞いたことないですね……」

当然の反応である。

「……………」
「きゃっ!!」

エルレイは！異次元から！イチゴタルトを取り出して！食べ始めた！（現実逃避）

「えっ、それ何処から出したの!?四次元ポケット!？」

グレンが絶叫した。なるほど、エルレイはあの猫型ロボットと同じで青いから…さすがは我が愛弟子だ！

ユウキはそのエルレイをじっと見て、何かに気づいたようだった。

「イチゴタルトはおいし……ん?」

エルレイは教壇の下を見た瞬間、思考停止した。

「誰かいる」

そう、そこにいるんだなあ!!これが！

「……起きて」

エルレイはその少年をやさしくゆすつた。

「んう…君は?リイエル……なわけないよね。ここはどこ?」

シヨタ…、少年は起きた途端、不思議そうにあたりを見渡して、目の前のエルレイに話しかけた。

「……また知らん奴が増えたぞ……。頼むから面倒ごとは勘弁してくれよ?これ以上減給されたら……俺は…俺は……ッ!」
「グレン先生……」

あはははあはははははははは!!!

最後にボソツと、エルソーが呟く。

「ふたりと……知り合い？」

しかし、エルレイには聞こえてたようだ。同様に小さな声でエルソーに聞き返す。

「……そう」

聞こえると思っていなかったのか、エルソーは驚いた後若干頬を染めて返した。

あらかわいい。

「そっか、よくわからないけど、ちゃんと別人だとわかって、えらい」

母性でも発揮したのか、エルレイはエルソーの頭を優しくなでた。

エルソーは気持ちよさそうにエルレイに頭を撫でられた後、教壇の下からようやく出てきた。

「そういや、なんで教室に誰もいないんだ？」

おお！ついにそこに気が付いてくれたかグレン！

「今日はわざと遅刻して、一時間目の授業時間を減らそうと思ってたのによ」

今　　す　　ぐ　　私　　の　　感　　動　　を　　返　　せ

「俺とエルレイさんはグレン先生が来る前にこの教室で目を覚ましたんですけど、その時から誰も居ませんでしたよ」

おっふ、ユウキ君や。グレンの屑発言を無視とは……………。

「うわっ!？」

突如、グレンたちの後方から大きな物音がした。そう、ここであの子の登場だ。

その少女は頭を押さえながら立ち上がる。

「ッ!」

エルソーは、突然の目の前に人が降ってきて、一瞬身を硬直させた。

「今度はだ……………え?」

エルレイは、その少女を見た瞬間。口元を抑えた。

「いたた……………あれ?ここは?……………おと……………グレン先生にエルレイ先生?……………貴方達は……………誰?」

「……………今の、天井をぶち抜いたわけじゃないよな!?嫌だぞ!?知らない奴が壊した天井の修理費で減給とか!？」

またグレンがヒステリックに叫ぶ。それでは女が寄ってこないぞ……………。

ユウキは、思考を巡らせているようだが、一旦落ち着き、少女に自己紹介をする。

「俺はユウキIIイグナイト。それよりも上から落ちてきたけど……………大丈夫か……………?」

「ユウキくんね。…イヴの血縁者かしら？目尻と髪色がそっくりだし、というか天井ぶち抜いてきたんだ……」

「怪我はない？フィーちゃん」

エルレイは、少女の事をフィーちゃんと呼び、駆け寄った。

「大丈夫ですよ。エルレイ……ねえね」

「……っ?!?!?!」

ねえね、という言葉に、エルレイは悶え始める。エルレイはねえね呼びが苦手なのだ。

「よろしくねユウキくん」

「ああ、よろしくね」

そんなエルレイを何のその、フィーちゃんと呼ばれた少女はユウキと握手をした。

「ねえねってなに？お前ら一体どういう関係…、ん？」

そこで、フィーちゃんと呼ばれる少女が、グレンの顔をじっと見ていることに気が付いた。

「俺の顔に何かついてるのか？」

「えっと、グレン先生…なんですよ？」

そういう反応になるのも当然だ。この子にとっては父親なのだから。

「……………大丈夫？これ食べる？」

いまだにごろごろと床を転がっているエルレイを見かねたのか、エルソーが駆け寄り、イチゴタルトを差し出した。

「あつ、いちごタルト。ありがとうエルソーくん。エルレイ先生、一緒に食べる?」

少女はエルソーに微笑みかけた後、エルレイにいちごタルトを見せる。

「……………もらう」

エルレイは、悶える体を抑えながら、いちごタルトを受け取った。

「……………フィーちゃん、さっきのはいやがらせ?」

「……………てへっ☆」

少女は可愛くごまかした。エルレイはその場でうなだれる。

「おおおい……………、良いーい性格に、なりやがったね」

そのいちごタルトは、売店のいちごタルトよりもおいしかったそう
な。

(……………あれ?俺のは?)

日頃の行いだぞ愛弟子。

2話

「シユウ君、どう？」

「うー……。ダメっぽい？」

この食堂にも場所にもセリカの被害者が二人。一人はシユウと呼ばれた赤髪の10代くらいの女顔の男の子だ。

なにかしているようだが……。

「次元がゆがみ過ぎてて操作しずらすぎ。エルザ、何か手掛かりあった？」

「んー、特には…話にあつた人形も見つかってないし」

シユウにエルザと呼ばれた女性は20代くらいで、緩く波打つ亜麻色の髪に眼鏡をかけていて、どこか落ち着きのある女性だ。

「全くもう、何が『孫に会いたいんじやく』だよ……」

「あ、あははは……シユウくん珍しく怒ってるね」

「当たり前」

シユウはその場に胡坐をかいて座る。

少しいらだっているシユウに、エルザは苦笑いを浮かべた。

「私と二人つきりはいや？」

「え？……あ……」

男女が二人きりという事によろやく気付いたのか、シユウの顔が少し赤くなる。

「……う……」

「ああもう！私の嫁が可愛すぎてつらい」

そう言いながら、エルザはシユウを抱きしめた。

「こ、こらー！抱き着かない——ん？」

刹那——。

シユウは突如、紫色の剣を手に取り、遠くへ投げる。

がっ!!

直撃したのは、そこにいた未知の生物。見た目は蛇のようだが、明らかに蛇とは違うオーラだ。

「……休ませてくれないか。エルザ。いくよ！」

「うん！」

ふたりは、未知の敵に駆け出して行った。

「ちやんと向き合う事が出来たからね。天井代でタルトは差し引きだよ。グレン先生」

壊したのは我が愛しのフィールなのだ…、まあ先生が肩代わりするのは当然か、エルレイも苦笑いするだけで助けようとしてないし。

あ、申し遅れた。天の声（セリカ）です♡

「って、ウマっ……」

エルレイのその言葉を聞き、エルソーは えへんつとどや顔している。

エルレイは、イチゴタルトの感想を言ってから、コホンと咳払いをした。

「一日話を整理し——」

「いや待て！たかがタルト1個で天井代賄えるか！くそう……また滅給じゃねえか……不幸だ」

「……………」

エルレイのいかりが1ふえた。

エルレイの言葉を遮り、タルトを受け取りつつ、グレンは膝をついて血の涙を流した。

我が愛弟子よ、嘆いても幻想殺しは手に入らんぞ？
イマジンブレイカー
む、作品が違うか。

「冗談ですよ。はい」

フィールはイチゴタルトを切り分け、グレンに渡した。

さすが!!

「いや、もうタルトはいいよ。それより、お前、ナニモン？」

学院の服を着ているフィールが気になったのか、グレンは名前を聞いた。

あ、そういえばフィールは名乗ってなかったな。

「えっと……その、私はフィール。フィールⅡウォルフオレンです。帝国宮廷魔導士団執行官N.O.0 《愚者》として存在してます。グレン先生の跡継ぎみたいなものです」

「帝国宮廷魔導士団特務分室の《愚者》……?!イヴ姉からは後釜は入ってないって聞いたけど」

「……………」

そのフィールの言葉に、ユウキは驚愕する。それも無理はない。そしてエルレイは事情を知っているのか、どこか俯いた表情で黙り込む。

「…俺の跡継ぎ？……こんなガキを雇うとか、軍の人手不足も深刻だなオイ」

「……グレンの跡継ぎ？そんな人いなかったよ？最近入ったの？」

グレンはあきれながら呟き、エルソーはどこか考えこむ。

「言っておくけど、この子、とっても優秀」

エルレイはまるで自分の事かのように、ない胸を張った。

「まあ、ですよね……なんか雰囲気と言うか持つてるものが違うなって感じはしますよ」

ユウキはなんとなくそんな雰囲気を受信していたのか、そんなことを言った。

イグナイト家の君も相当だと思いがな！

「……………」

「……………」

グレンはエルレイの体をじっと見ながら一言。

「……………絶壁だなエルレイ」

エルレイの いかりが 2 ふえた。

女性にそれはないだろグレンよ……。

「はっ、これだから胸にしか目がいかないものは困る実際問題胸が小さい人のほうが良いことばかりだよ胸が小さいほうが戦うとき邪魔にならないしうつ伏せで寝るのも苦じやないし何より肩がこる事もないそう胸の小さい事は誇るべき事なのだ決して——」

エルレイが、怒り始めてしまったな。草

「ガキって言わないほうがいいですよ。それにエルレイ先生はまだ希望があるんですよグレン先生」

「……………」

フィールの何気ない言葉が、エルレイの心を傷つけた！

26歳に希望とか言っちゃあかん。

エルレイの いかりが 3 ふえた。

「それに……………」

刹那——

「っ!？」

フィールが早撃ちクイック・ドロウの体制になった瞬間、グレンの顔が強張った。

「ガキで女の子だからって甘く見ない方が身のためですよ」

早すぎる。目で追えるものはごく少数だろう。そして、この中でもこの速さに勝てる者がいるかどうか……………。

「多分だけど…エルレイ先生もユウキくんもエルソーくんもグレン先生も私もみんな違う世界…、平行世界といえばいいのかな？そこから呼び寄せられた。私とエルレイ先生はこの現象を知っている」

さすがフィールちゃんだ！状況整理がはやいぜ！

それと同時に、エルレイはどや顔で、またない胸をはる。

「…俺、大きいほうが好きだわ」

「……………」

グレンお前ブレないなあ！

エルレイねえねお怒りだぞ?!

「《《万象に希う・我が腕手に・剛毅なる刃を》》

ドンっ——

エルレイが詠唱した後、あたり一帯に紫電が走る。

そして次の瞬間。エルレイの手にかなり大きな大剣が生成されていた。

これこそ、エルレイ…リィエルの真骨頂。十字架型クロス・クレイモアの大剣である。

「ぶっ 殺ろす」

「／（ハッ）／」

その瞬間、グレンは脇目もふらず逃走。

鬼ごっここの始まりである。

年頃の少年少女たちは、その光景を呆然と見ているしかなかった。

「このやろう…、もう一回ボコってやろうか」

「え、エルレイさん落ち着いて……!」

エルレイの　いかりが　6　ふえた。

ユウキのヒール発動　3　へった。

「そういえば、フィール……だっけ？平行世界がどうたらって言っただけかどうか教えてもらってもいいか？」

ユウキはエルレイを落ち着けながら、フィールに問いかける。

………だが。

「お、おい。待てユウキ。それ以上言うな」

「ちよ、な、なんですか、いきなり……」

またグレンという男だ。

ユウキの肩を組みながら、小声で話し始める。

「いいか？あのフィールとか言うやつはな、中二病という病を患っているんだ」

「はあ……中二病、ですか」

「いきなり平行世界だと言われて、そんな簡単に信じられるか？無理だろ？つまり——」

「……」

エルレイの　殺意が　10　ふえた。

「………エツちゃん、助けて、憤りで死にそう、イチゴタルトあげるから」

エルレイはなんとなくエルソーを膝に乗せ、ため息をついた。

「…えっ…ありがとう」

今までのエルレイの豹変ぶりにずっと固まっていたようだ。エルレイの声で我に返った。

そしていちごタルトを受け取り、さながら小動物のようにハムハムと食べ始めた。

「Q. E. D 証明完了だ」

「……はあ」

ユウキは何言ってるんだこいつ。という顔でグレンを見ていた。

ちなみにこのセリフ、実際はもつと長いのだが……

小説にまつつつつつつた関係がないのでほぼカットだ。

「この人のことは置いておいて……、フィールとエルレイさんが俺たちの置かれているこの状況に心当たりがあるってことで良いかな？」

ユウキ君、恐ろしいほどのスルースキルを發揮しております。

「全く、中二病すら救おうとするとは、お前はなんてやさしいやつなんだ……！どこかの

ヒステリック女とは大違いだな！俺は感動した！」

ヒステリックはお前だ愛弟子。

「グレン先生は薄っすら心が読めるから後でお話するとして、私とエルレイ先生はこの現象を知ってる」

そう、フィールとエルレイはこのようになことに巻き込まれたことがある。

だが前回は手紙で呼び寄せられた。
その主犯は私と少し関係があるのだが…その話はまた今度にしよう。

「この場所を調べてみたけど、変な術式があちこちに組み込まれて結界と言うか学院時代が異界化してる。変化無いみたいだけど、グレン先生試しに窓を開けてみて」

フィールがグレンに指示を出す。しかし学院のドアは開ける事は出来ても『外』に通じる窓は……

「……ん？窓？……あれ、開かねえぞ？……なんかの結界で覆われているのか？つたく、誰だよこんな悪戯した奴」

そう、開かないんだなあ!!これが!

「閉じ込められた……か」

そうつぶやいたエルレイは、トントんと床をたたき始めた。

この行動は、エルレイだけがわかる音波を出し、その音波で地形、生物の場所などを特定できる。とても使いやすいものだ。

「……………」

もちろん対策済みだがな!!!

「グレン先生、下がって」

フィールに言われて、グレンは窓から離れる。

右手を窓に向けて、詠唱を始める。窓は手動では開かない。なら、魔術は？

「《吠えよ炎獅子》！」

灼熱の衝撃が窓に激突する。

しかし、窓は傷一つ付かない。もちろん、この程度で壊れるほど軟ではない。

壊す方法があるとするならば、0.005秒以内に、全ての魔方陣を解除するくらいかな？

「あの威力の『ブレイズ・バースト』で傷一つつかない……か。こりや、まためんどくさいことになったな」

ファイルの『ブレイズ・バースト』を見てユウキは呟いた。

「セリカでも居たら楽勝だったかもな」

愚痴るようにグレンが呟く。

ここに いる ぞ !!

まさか主犯だとは思うまい。

「……とりあえず、こいつを試してみるか」

む、グレンが『イクステインクシオン・レイ』の触媒を取り出したな。撃つつもりか？

「待って」

それをエルレイが即座に止める。

「……なんだよエルレイ」

「状況が把握できない、何が起こるかわからない。今後のため、消費の

多い術は止めたほうが良い」

「……へいへい。そうでしたね。つたく、めんどくせえ」

エルレイの言葉に一理あると思ったのか、グレンはおとなしく触媒をしまった。

エルレイは膝にエルソーを乗せた。なんで？

「……ん」

膝に乗せられたエルソーは自然に受け入れて、またイチゴタルトをエルレイに渡した。……なんで？

「ありがと、おたべ？」

それを受け取り、エルレイは一口食べてからエルソーに返そうと――

ひよい

が、直前で上にあげた。

「ろりかわいい」

何を見せられてるんだ私たちは……。

「とりあえず、フィールが中二病じゃないってわかったという事で……、どうしますか？学院内を探索しますか？」

ユウキ君！君すっごいな！まとめようとするとか紳士かよっ！

「ん、そうだね、そうしよう」

エルレイがユウキに賛同する。

「フィールの中二病の可能性がなくなったわけじゃないが、それが一

番だな。さつきはエルレイをまくのに必死でロクに内部の確認してなかったしな」

お、わがグレンのエンジンもかかってきたな、よいぞよいぞ。

「?…学校探索、頑張る」

エルソーも気合十分だ。

「探索には賛成なんですけど。んー、どうしよう。5人で動くか二手に分かれるか…。五人だと手間がかかるし、この異界に長時間居てもどうなるかわからない。けど敵に襲われる可能性もなくはないんだよねえ……」

そんな風に、フィールが考え込んでいると。

「いや、3つに分かれるぞ。エルレイとエルソー。フィールとユウキ。俺は一人で行く」

グレんが突然、そう切り出した。

「ばか、それはダメ。グレん一人では、戦闘力が著しく空しい」

即座にエルレイが反対意見を出す。おそらくグレんが一人というのが我慢ならないんだろう。流石リィエルだ！（実は違います）

「固まって動くべき、未知の場所で、別行動は止めたほうが良い」
「……それに僕の固有魔術はグレんの愚者の世界の影響受けないから、グレんも一緒に行こう?」

今、さらっと凄いいこと言ったぞエツちゃん。愚者がきかない魔術師

てやばくね？

「…………それはお前たちの知っているグレン先生だろ？自分で言うのもあれだが、俺は結構強いほうだぞ。心配すんなって。それにぎつと覚えてる範囲じゃ、ここはアルザーノ帝国魔術学院と構造が同じだ。迷うことはねえよ」

グレン…………立派になったな。（違います、ただフィールとエルレイと共に、面倒なことになりそうなので嫌なだけです）

「わかってる、でもその驕りは命取り、固まって動いたほうが良い。私が見みんなを守る」

リィエルも…………成長したな！（違います、ただグレンが離れると面倒だと知っているだけです）

「…………フィール、グレン先生が何を考えているかみんなに教えてあげて」

「エルレイ先生と私と行動すると面倒だからですね。エルレイ先生、stand by?」

エルレイが大剣をグレンに構える。

エルレイは犬か。

「それにこの場所は異界で魔術で最初から形成されてる以上『愚者の世界』も多分殆ど使えませんよ？でもエルレイ先生、この異界なんか凄く嫌な感じだし、分担して早めた方がいい気がします」

なるほど、そんな嫌な感じになるのか私の結界。もうちよつと優しくするべきだったかな？

ところでグレンがメツチャ問い詰められてる表情してるんだが。

逆転○判かな？

「エルレイ先生とエルソーくんとグレン先生。私とユウキくんが二手に分かれて探索。一応通信魔導具があるからエルレイ先生と私が持つてる。異論はありますか？」

「フィールが提案を締めくくる。

「グレン先生、今は面倒だろうと関係ない。命に関わる可能性があるんだから、面倒で逃げるなら怒りますよ？」

フィールはそうグレンに言うが…グレンの様子がどこかおかしい。

「ちよつと待って。やばい」

グレンが何処か、焦ったように言う。

「俺はフィールの意見には賛成だけど、何かあるんですか？グレン先生」

突然焦りだしたグレンに、ユウキは問いかけた。

そして出た答えが……………

「……『愚者のアルカナ』失くしたんだけど」

「……は？」

「はいっ？」

「……………はあ?!」

「…え？」

その場の全員の思考が一瞬停止する。

エルレイの ickariが 11 ふえた。

「えっ、グレン…、ちよ、おま…、ふざけないで?」

ピキピキ……と音を立てながら、エルレイは問いかける。

「いや、さっき、お前が俺の事追いまわしてただろ? その時お前、剣振り回すだけじゃなくて、「フィジカル・ブースト」までして俺のこと切ろうとしたじゃん? その時、咄嗟に【愚者の世界】使ったんだけどその時に……」

いちいち懐に戻すのも面倒になったので、適当に放り棄てたという訳か。

馬鹿なのか???

これには、ユウキもため息しかでないようだ。

「だったら、尚更エルレイさんとエルソーに付いて行った方が良いじゃないですか……さっきの追いかけてここで道を知ってるのは二人なんですから、そこを探索するついでに通れば良いんじゃないですか?」

「まあ、そうだね」

そう言いながら、エルレイはため息をついた。自分のせいだという罪悪感が、少しだけありそうだが。

「フィーちゃん、マジで胃薬持ってない？死にそう」

それより怒りが勝っているらしい。

「私が欲しいですよ。とりあえず、グレン先生。コレ貸してあげます」

フィールの懐から出されたのはグレンが持つそれと同じ【愚者のアルカナ】だった。キャーフィールちゃんカツコウイウイー。

「えっ、なんでお前がそんなの持つてるの？ストーカー？」

グレンが若干怯えた目でフィールを見る。

え、なんでそうなの?!

「……………!!」

フィールが思い切りグレンを殴ろうとしたが、その手を下ろした。

「いい加減に道化を演じるのは止めるグレンリーダーズ。じやなきゃ、真っ先に消えるのは貴方なんですよ」

フィールには、少し酷だったかもな……失敗だったか。

「落ち着いて、フィーちゃん」

エルレイはフィールに近づき、そつとフィールを抱きしめた。

「あなたの気持ちもわかる、でも落ち着いて……大丈夫……大丈夫……」

そう、エルレイには気持ちが痛いほどわかるであろう、何せ自分の

兄貴分だ。自分の兄貴分とは思えない発言、少し憤りを感じてもおかしくはない。

口には出さないが、おそらくエルレイはグレンを警戒している。

「…………ふん、それがお前の素か。…………やっぱダメだわ」

突如、今までのどこかふざけた態度が一変して。

「よし、もう一度メンバー決めするぞー。エルレイ、エルソー、ユウキ、お前からで組んでくれ。俺はフィールと組む」

勝手にメンバーを再編成した。

「何勝手に……………」

フィールはグレンの意見に反対しようとする。

「フィールちゃん。まっつけてくれ」

エルレイは、口調が変わり少し落ち着いた表情で聞き返す。

「なんでそのチームか。聞いてもいいかい？」

おそらく、エルレイの中にいるもう一人の人格、剣の姫エリエーテが口をはさんだのであろう。

「【愚者の世界】がない俺じゃ、誰と組んだって一緒だ。それに、こいつには個別指導が必要らしいしな」

そう言つて、グレンはエルレイエリエーテに答える。

「ド変態デリカシーなき男のグレン先生の個別指導とか嫌な予感しかないんですけど……？」

ユウキがグレンの今までの言動などから考えて、今の言葉に少し引いていた。

「嫌ですよ。私から断ります。魔術戦で相性最悪なのに、近接重視のエルレイ先生の方に行ってくださいよ」

「俺だつてどちらかという近接型だぞ？魔術戦に関しても三流の俺じゃ、あいつらに混じつたつて足手纏いだぞ？」

どれだけ嫌がられても、フィールと一緒に行くと言つてきかないグレン。

だが、その目は至つて真剣だった。

「……………はあ。フィールちゃん。僕は観念してそのチームにしたほうがいいと思うよ」

基本的にエルレイは、フィールの味方だ。だがここで、フィールと出会つて初めて反論の言葉を口にした。

フィール「……………わかりました」

フィールは渋々ながら受け入れる。

あの状況を落ち着かせるとは、さすが姫と言つた所か。

「…フィール、この人に何かされたらちゃんと言えよ？俺たちがすぐに駆け付けるから！」

ユウキはグレンを指さしてフィールにそう言った。

ユウキくんまじ紳士 Y M S 。

「…ところでグレン、二人じゃないとだめなの？」

単純な疑問というようにそう聞くエルソー。

「……まっ、そういうこった。心配すんな」

ポンツと。エルソーの頭に手を置いて、微笑みながら答えるグレン。

「…そう」

エルソーはなおもグレンとフィールを心配そうに見るが、それ以上の追及はしなかった。

「その子の事、頼んだよ。セリカの愛弟子さん」

エルレイは、やさしく微笑みを浮かべた。すると。

「——っ!!ひめ。おしやべりがすぎる」

エルレイは先ほどと同じ口調にもどる。

どうやら人格が戻ったらしい。

「フィーちゃん。納得できない気持ちもわかるけど。こうなったら、

グレンが曲げないのは…貴女だっってわかってるよね」

「……はい、嫌ってほど。まあ性犯罪者になるつもりなら、女の子にするけど」

フィールが腰に帯刀した魔剣に触れると、グレンは自分の息子を抑えてフィールから離れた。

「ん、頑張ってるタルト」

そう言っって、エルレイはまたどこからか、イチゴタルトを取り出し、フィールに渡した。

「お食べ？胃薬搭載型大栄養摂取食 I☆THI☆GO☆TA☆RU☆TO」

「そ、そそそ、それれじやじやあ、たた探索かか開始ー！」

グレンが震える声で号令をかけ、全員がそれに従い、教室を出た。ささて、面白くなってきたじやないか。